

2023年3月23日

2022年度第2回 学校関係者評価委員会 報告書

学校法人山口学園
ECC 国際外語専門学校
学校関係者評価委員会

学校法人山口学園 ECC 国際外語専門学校は、「学校関係者評価委員会規定」に基づき2022年度第2回学校関係者評価委員会を実施いたしましたので、以下の通り報告いたします。

1 実施日時 2023年2月11日(土) 14:00-16:30

2 実施場所 ECC 国際外語専門学校 1号館9階

3 学校関係者評価委員 ※順不同

(1) 関連業界等関係者

委員長 岡 裕次氏 株式会社Kスカイ 代表取締役社長

塩谷 典子氏 株式会社TEI 大阪支店 支店長

(2) 地域関係者

中上 隆雄氏 済美地域社会福祉協議会 会長

(3) 高等学校関係者

貴治 康夫氏 高等学校 教員

(4) 卒業生

杉井 繭氏 ECC 国際外語専門学校 卒業生

(5) 同席者

瀧山 淳一 ECC 国際外語専門学校 学校長

大谷内 圭 ECC 国際外語専門学校 副校長・教務課責任者

伊藤 功 ECC 国際外語専門学校 進学指導センター長

新 大承 ECC 国際外語専門学校 専門課程留学生コース 責任者

榊原 悠祐 ECC 国際外語専門学校 教務課主任

松井 治 ECC 国際外語専門学校 英語課責任者

岡 恵一郎	ECC 国際外語専門学校 広告広報課責任者（当日欠席）
奥 大輔	ECC 国際外語専門学校 入試課責任者
山本 昂輝	ECC 国際外語専門学校 キャリアセンター責任者
新谷 優貴子	ECC 国際外語専門学校 教務課専任教員
書記 藤枝 健一	ECC 国際外語専門学校 教務課

※学校関係者評価委員の佛教大学教授 原 清治様は都合により欠席。

4 報告内容

(1)開会挨拶【瀧山】

- ・2022 年度は行事や留学が少しずつ回復した。留学はオーストラリア、ニュージーランド、韓国と再開できた。
- ・行事として、スポーツ大会や飲食含む模擬店開催を伴った学園祭など対面形式で行った。卒業記念パーティーは昨年より中止、卒業式式典のみの開催で行う。
- ・学校関係者評価委員会は、学校運営、学校での取り組みに対して、外部から意見を賜り、改善につなげていく目的で実施している。9月にいただいた意見は、学内で 12/26 に学校評価委員会を行い、今年度の振り返りを行った。

(2) 2022 年度第 1 回学校関係者評価委員会での課題について 各部署責任者による報告

- ・ICT 活用力の強化【大谷内】
- ・今年度 ICT プロフィシエンシー検定（=P 検）を試験的に希望者のみの選択科目として導入、結果パソコンのリテラシー能力の低さが見られる学生が多く、予期した以前のレベルから始める必要があったと実感している。
- ・前期 15 コマ後期 15 コマ通年でやっと 3 級を取得できる。
- ・2023 年度から ICT リテラシーの可視化ができる 3 級取得を大学編入コース以外の全コースが卒業目標とする。
- ・本学が目指すのは、3 級（企業入社時に必要とされる ICT 活用スキルを持った人材）を社会に送り出したい。
- ・情報系高校出身の学生はすでに資格を持っている場合があり、準 2 級・2 級取得を目指したい。ワードやエクセルなどのソフトウェア操作だけでなく、データを活用した発表など課題解決ができる人材を育てたい。
- ・オンデマンド科目については、自学自習が繰り返しできるビデオコンテンツを作成し、概ね良好な結果が出ている。
- ・オンデマンドに向いている科目知識詰め込み・一方通行のインプット系の授業はオンデマンドに移行できるものはコンテンツを引き続き作りたい。

- ・次年度から全学的に P 検の資格試験を導入していきたい。

- ・学生募集の回復に向けての取り組み【奥】

- ・高校との連携再構築、高校ガイダンスをはじめ、英検対策・出張授業により募集の回復を狙う。高校生との接点を創出する。

- ・大学との差別化、強みとしての 3 年制国際キャリア学科での学び、ICT の取り組み、海外での実活動など、ECC でこそ体験できる価値を創造し、高校生に届ける。

- ・各部署が連携し、来校イベントの訴求力を引き上げていく、募集だけでなく他部署と新しい情報を共有し、教育機関としてのブランディングを図る。

- ・中学生と高校 1 年生から積み上げていく認知活動が重要、ECC の強みや実績を着実に伝えていく必要がある。

- ・生き生きとした在校生との交流・国際的な視点を持ち情熱的な教員によるオープンキャンパス・グローバル活動をしている卒業生や留学生情報の共有・グローバル企業によるセミナー実施などで訴求していきたい。

- ・教員のモチベーション維持・教職員のメンタルヘルスについて【伊藤】

- ・管理職が教員との面談を行い、年内に終了。教員の次年度に向けてのモチベーションなどを確認。

- ・次年度各教員が授業において力を発揮できるよう、授業モデルの研修を企画している。本校教員として目指すべき理想の授業の姿を求めるために、3 年～5 年計画で ECC 国際外語専門学校独自の授業モデルを構築したいという目的のため。

- ・教員 4 つの役割、授業 7 つの活動、授業構成の 3 要素を明確にし、22、23 年度 3、4 月に研修を行う。

- ・自分の授業に対して行う自己評価に関するアンケートは年度内には年間授業計画の研修・学習指導案の研修を考えている。

- ・教員資質研修、アクティブラーニング研修など、授業に対する自信をつけていき、教員のモチベーションを上げる。

- ・メンタルヘルスに関しては、学生相談室で教員の相談もでき、相談室との連携を強化し、教員が抱える問題を共有する。

- ・地域連携の強化 人間力向上にどのように関与させるか【榊原】

- ・学園 3 校が参加できるボランティア活動をサポートする社会貢献国際交流センターでは、地域と連携したボランティア活動を行っている。現在国際の 20 名ほどの学生スタッフが在籍している。

- ・学生主導で SDGS の観点から実現した企画ペットボトルキャップの回収プロジェクトもを行っている。昨年からは開始し、回収したキャップ数 15,000 を超え、そのキャップを開発

途上国のワクチン接種に役立てる活動である。

- 主体的にボランティア活動を行う学生がいる一方、現状限られた学生のみである。
- コースへの拡張、コースゴールとして取り入れ、学校として参加する活動にしていく必要がある。
- 高等部では探求の時間を導入するのを例に、専門学校でもその時間を設け、グローバル人材を育成する学校として、社会貢献に主体的に行動に移せる人材を育成していきたい。

◆委員からのご意見/ご質問

塩谷委員

- 高校生に限らず、中学生・高校1年生への認知活動はすぐ実行することが大切。
- 高校生になると大学が目の前という意識が高い、そこから進学先を変更させるのは現実的に難しい。

何をしたいのかわからない学生に何をしたいのかを訴えるには、中学生が一番本人たちにとっても考えられる時期である。

- 今の大学生も入学から就職、どんな職種業種があるか分からない、目標を持っている1年生はインターンなど早期に動く子もいる一方で、何もできない学生もいる。
- 高校生が大学あるいは専門学校に行くのを決める、そこを対象にするのは遅い。中学1年生の段階でこんな学校でこんな勉強ができるというのを示すのがよい。
- 家庭環境もあるが、英語の苦手な中学生が案外英語ができたりする。早い段階でECCの強みを広めていけばどうか。

貴治委員

- ICTを活用してオンデマンド授業を提供することは、コンテンツをアップするものとチューブにアップするものを実施した経験がある。一方通行的な非常に有力なコンテンツだが、学生とのコミュニケーションが大事。課題を必ず都度提出させ、その反応を見るようにしている。

オンデマンドというコンテンツを活かしながら、双方向に近い学生とのやり取りが必要だと感じた。

- 大学との差別化での学生募集について、ECCの他校にない特徴として、外国語・アーティスト・コンピュータが備わっている専門学校の横のリンクを張って、生徒を募集できる手立てがあれば魅力的になるのではないかと。

大学では学部ごとに分かれているので、そこに特化した学生募集しかできず、上記全く違う分野を融合した専門学校ということを全面的に押し出すことで、大学との差別化を図れるのではないかと。

- モチベーションについて、学生相談室との連携が非常に大切、中退を防止する・途中で引き留めるために、個別対応が必要。

- ・地域連携について、高校ではボランティア実習や課題研究の中でグループホームの見学など行ったが、学生をひきつけにくい。コースカリキュラムへ拡張する方向は間違っていないと思う。自主的にするのがボランティアだが、意識がまだ湧かない若い学生には、半強制的に行ういろいろなボランティア活動に持っていく誘導が必要だと思う。

中上委員

- ・学生が地域ボランティアに参加して、世代の違う方との交流が大事ではないか。年齢が高い方と溶け込んで話をする学生がおり、それにより先の就職活動でも年代の違う人と話せるようになるのではないか。
- ・交流にもっと参加してもらい、そこに楽しみを見つけることが大事。ボランティアの程度の多寡は別に、学生には就職後もストレス発散の場として、また来てもらえるように接している。

杉井委員

- ・学生募集について、高校1年生からの認知活動が重要ということで、オープンキャンパスのスタッフとして参加していた当時、高校1・2年生の参加者が少なく、自身もECCを知ったのが高校3年生の5月の学内進路ガイダンスで初めて知った。
- ・その時期では大学と専門学校どちらも考えているのは少数で、早いうちから専門学校の魅力を伝えるのが大事だと思う。
- ・ECCは入学してから英語を勉強することは決まっているが、英語を勉強してどんな仕事をすればいいか全くわからない学生もいるので、入学前からこんな職業があるというのを高校生にアピールするのが入学してからの就職活動につながる。

岡委員

- ・ICTについて、以前入社してきた世代はPCスキルあり、スマホが発達してからPC不要になり、ICTリテラシーが急激に落ちているのを感じる。企業側としては基礎的なPCスキルを習得してから入社してもらいたい、それにより最初の部署・配属先の範囲も広がる。
- ・海外に10年以上おり、2003年から2008年中国のインターナショナルスクールでは、小学校でマックブックが配られ、技術者も駐在し、すべての授業がPCを使ったり動画を見たりし、欧米の主流だった。今日本は15年ぐらい遅れている、ICTを前面に出して教育をするのが大切。
- ・海外インターンシップについて、ある高校では高校2年生の段階で海外でのグループ企業研修を行っていた。講話を聞き、テーマを決め、プレゼンを英語で行い、企業に聞いてもらい、ディスカッションし、講評してもらうということを行っていた。国際化を目指す高校は現地の日系企業に直接コンタクトを取り、産学連携で協力をもらえるようにしていた。英語という強みを活かし、どこかの会社にコンタクトできれば、非常にいいきっかけになるので

はないか。

・教員モチベーションについて、オンライン授業はスキルが必要。人間力も試され、工夫も必要。有名国立大学の教員でもオンラインを嫌がる傾向がある。オンライン授業の充実は先生方への負担をかけることにはなるが、学校の実力を見せられるので、注力する必要がある。

(3) 2022 年度学校運営の振り返り 各部署責任者からの報告

募集【奥】

- ・23 年募集集客累計 2/4 時点 300 名、昨年 335 名で同日比 10%減少
- ・日本人のみの出願状況 145 名、同 202 名で約 30%減少
- ・日本人は観光系が集客・出願ともに大きく減少した
- ・留学生込みの出願状況 171 名、同 298 名で約 40%減少
- ・留学生は 2021 年コロナによる影響が一番大きく、入国制限があったため、現状入学者数を減らしている

教務課【榊原】

- ・今年度学生アンケート授業満足度の結果、数値は大幅に向上。
- ・1 つ目は、対面授業また行事も通常通り実施できたため。昨年はオンラインだったが、対面となることで学生との連携が築けるようになった。スポーツ大会・学園祭により交流機会が増え、学習意欲の向上にもつながった
- ・2 つ目は、教職員の ICT 活用力の向上により、効果的な授業を提供できているため。全学生へ PC 貸与し、グーグルクラスルームを利用し、予習・復習・授業内でのやり取りができています。
- ・3 つ目は、教授力向上を目指した学びあい制度を導入しているため。教員が授業を見学し合い、自分の授業に還元することによって、学生にとって学びの深いものにつながっている。
- ・進級卒業率は昨年と大きな変化はない、退学より休学する学生が増加している今年度はコロナにより学校で留学ができず、個人で留学する学生が多かった。今後は社会情勢にもよるが改善されていくのではないかと考えています。
- ・今後は入学前教育の位置づけが大変重要である。入学直後の面談ですでに休退学を考えている学生がおり、入学前教育により期待値を高めることを意識し、その後は個別面談の回数を増やし、保護者の協力を得て早期で学生の変化に気づけるよう体制を整え、次年度は進級率卒業率向上したといえるようにしたい。

英語課

- ・英検は、2022 年末英検協会より 2021 年度の文部科学大臣賞受賞、6 年連続、2006 年度から 11 回文部科学大臣賞受賞、連続受賞を目指したい。
- ・TOEIC は、スコアとして 2 年次のほうが昨年度比で上がってきているが、今年 1 年生は

コロナ世代で学力が厳しい状態。各種プログラムを準備していきたい。

- 教育イベントとして、ECC 英語スピーチコンテストは全国大会の規模であり注目を集めるが、今回は 1 位、2 位受賞で、最優秀賞のグランドプライズは受賞なし。グランドプライズには副賞で海外 1 か月留学などあるが、年々盛り上がり低下しており、モチベーションが上がらないため、工夫が必要となっている。
- 2/9 の GEA は、グランドプライズは留学生が受賞、最近は留学生受賞が多く、日本人への指導を強化したい（松井）

- 短期留学について、昨年現地エージェントと WEB ミーティングを行い、渡航国を選定し、留学がカリキュラムに組み込まれているコースのみに限定した実施を行った。
- 渡航国は時差の少ない国のオーストラリア・ニュージーランド・韓国で実施、韓国は 44 名参加し、現地でコロナ罹患者が出たりしたが、ワクチン接種など行った上だったため、大事には至らなかった。
- 留学したいとの思いから本校を選んだ学生がほとんどで、夢を手伝えたことは幸이었다（新谷）

キャリアセンター【山本】

- 今年度の内定状況 92.4%、語学系 87.1%
- 今年の特徴として各コース業界就職を目指せる求人があり、昨年を上回る数値となっている。コロナ前は 1 月末で 97%あったため、就職分野でもモチベーションが低い学生との 2 極化が出ている
- 今までと同じ方法では就職分野では限界があるのか、ボトムアップと意識が高い学生へは別の視点での指導していかなければならないため、難しさを感じている。
 - コース毎の特記事項として、エアラインコースは客室乗務員が昨年 1 名、今年 9 名が内定、一人辞退したが内定者ベースは 10 名と二桁になっている。国際ビジネス・語学系コースは他分野での就職が多く、今年度もホテル・物流・アパレル・空港から多数内定をいただいている。
 - 国際ビジネスコースは貿易物流を目指すコースで、多くは日本通運・鴻池運輸様にお世話になっているが、通関士の勉強をしている専門性から、力が認められ外資系の物流企業からの内定をもらったのも一つの特徴である。

大学編入コース【伊藤】

- 2/1 時点で、延べ合格者 74 名、昨年 138 名、現象は今年の学生数が 70 名ほどのため昨年度と比較し、神戸大学合格はゼロ、関西学院大学が募集をとりやめたが、有名大との昨年度の比較では難関大学の合格率は若干回復している。
- 桃山学院大学など中下位校からの合格者が出ており、昨年同様安全志向が拡大している。

- ・学生数が少ない中で、教員学生が頑張って結果を出した。

留学生【新】

・3月53名卒業のうち、48名が日本に残り日本の企業で働きたい、1月末就職内定している。残り5名のうち、帰国は4名母国の会社で就職、1名はオーストラリアに留学する。去年帰国7名はコロナの影響が心配と多かったが、今年は希望通り内定をとれている印象である。

・進路先は、空港系・ホテルなどの求人が増え、ハードルは高いままだが、応募できる企業が増えて、いろいろな会社にお世話になることとなる。

・去年ぐらいから飲食のアルバイト先での働きぶりなどを評価されてそのまま就職することが増えている。コロナの状況が変わり、飲食での人材不足はあるが、人物像を評価されてありがたいところがある。

・日本語学科、国際コミュニケーション学科は、大学に入学するための日本留学試験は450点満点中300点で、関西の産近甲龍以上の合格レベルの日本語力と認められるが、前期・後期もその学生数は半減している。

・2022年4月から入国が認められたが、学生数はそれまでの半分である。オンラインで語学授業を行う困難さがあったのか、日本語力が実質を伴っていないこともあった。

・大学進学状況は、大学進学/進学準備コースは学生数去年200人、今年度100人、そのまま減数している。日本語能力も低く、有名難関私大の合格に至っていない。難関でない留学生募集が旺盛であるため、すでに8割強が合格が出ている。

- ・授業満足度アンケートは満足されているが、教育成果は思い描くところまで出していない。

◆委員からのご意見/ご質問

岡委員

・航空業界CA/GSスタッフの採用は旺盛になっている。コロナ前2018年に比べ、求人数は多いが、レベルは下げている。企業動向として、100人採用したくても割り込んでもいいと考えている。今ある人材でできる仕事をするという方向に変わりつつある。

- ・一方、航空会社のCAは安全基準から必要数があるため、中途採用なども行っている

・入れ替わりが激しい会社では、ほめてくれないからやめるという人もおり、人事から見ると極めて承認欲求が高い人が多い。学生も同じではないか、いつも見ているというサインを出すのが必要かもしれない。

・目先として、春ダイヤから中国線を飛ばしたいことは聞かすが、一般的に4月にすぐ戻ることはなく、5月に水際対策が緩み、学校では後期から影響が出てくるのではないかと。

貴治委員

- ・コロナのここ数年の影響が濃く出ているが、数字にとらわれずコロナ後を見据えて動く必

要がある。

- ・留学生が入国制限緩和により増えているが、卒業後の進路先を日本に残って働くつもりか、母国に帰って働くつもりか、どちらが多いのか？

新：

- ・募集や入学選考の段階で定員がわかり、今年までは定員よりより応募者のほうが多かった。卒業後日本で働きたい、もしくは日本企業の海外支社で働きたいという学生、日本で生活したいという学生の留学が多くなっている。

(4)23年度の運営方針について【瀧山】

- ・各部署からの今年度の取り組みを報告し、21年度の学修成果として英検の文部科学大臣賞受賞をいただくことができた。

- ・昨年度実績とはなるが専門力の教育成果として、エアライン・ホテル・韓国語の学生が接客サービスを測る試験として、サービス接客実務検定試験の2022年度優秀団体賞を受賞した。昨年は文部科学大臣賞全国1位であったが、次のカテゴリーとして連続受賞ということで団体賞をいただいている。

- ・サービス接遇については、2018年初めて文部科学大臣賞を受賞し、5年間で文部科学大臣賞2回、優秀団体賞2回受賞している。英語と専門力の教育成果を高校生に届けたい。就職は、求人はコロナ下で入学し業界募集が全くない状態から徐々に回復し、客室乗務員9名内定し、進路実績を示すことができた。進路選択をする高校生及び高校教員には業界の回復基調というものが届かず、求人が戻ってきている・内定が出ているというところを企業様にお力添えいただき、出口をしっかりと示していこうと考えている。

- ・指定校推薦という形で、学んだ先に職業が待っているという流れを示したく、去年のKスカイ様から指定校推薦いただいた流れを活用させていただき、新たにHOTEL THE MITSUI KYOTO様・スカイマーク様からも今年指定校推薦枠をいただき、今年度の学生から指定校推薦枠を使いながら、進路決定を進めている。

- ・現在の課題は、学生数の減少の回復を目指しているが、18歳人口の減少・コロナの影響・大学に入りやすくなっている・コロナで留学生が入国できないなど全てが重なって苦戦しているが、英語と専門力の部分をしっかり打ち出し、学生数の回復に努めたい。それを踏まえ、次年度のスローガンとして、国際力・専門力・人間力・ICT活用力を掛け合わせた国際派進路の実現、進路に強い国際外語を目指していくよう2023年度も取り組んでいく。

- ・業界就職がゴールではなく、そこから長く活躍できる真の国際人を育成していきたい、英語教育については引き続き日本一を目指したい。

- ・新たな取り組みとして、高等部を次年度4月から開設していく。広域通信制のECC学園高校と連携し、そのサポート校として中学卒業の生徒さんを新たに迎え入れていくよう募集を行っている。

背景として、近年全日制・定時制課程の生徒数は減少しているが、通信制課程の生徒数は増えている。2021年度の学校基本調査によると、通信制課程で学ぶ生徒は今年度218,428人おり、通信制高校の分野は非常に伸びている。

- ・今は学習時間、学習時期・タイミング、学び方を自分のペースで学ぶことができるというのが世の中から支持されており、この分野に今後進出していきたいと考えている。

- ・学園として専門学校生事業、留学生事業に加えて、高校事業を3つ目の柱として据えており、すでにコンピュータ専門学校では昨年度から開講、国際外語専門学校とアーティスト美容専門学校では今年4月から開講する。

- ・大学編入進学 of 学生は3号館、留学生は2号館と機能ごとに分かれていたが、1号館を中心に機能を集約し、効率的な運営と連携を見直していく。

23年度のコース・学科は、ホテルコースは3年制へ移行、トラベルコースは募集停止ということでホテル・観光学科がなくなり、次年度の募集を行っていく。

榊原：

- ・高等部の募集コンセプトとしては、早期からとことん英語を学んで進路選択の幅を広げること。

- ・募集活動で感じたことは保護者の皆様は安心感を感じたい生徒の皆さんはわくわく感を感じたいことがあり、本校の強みである留学生数や外国人講師数の多さに着眼点を置いて、まるで海外に留学しているかのような雰囲気学べる場所ということをお伝えしている。

- ・コロナ禍もあり日本で学ぶのであれば高等部がいいと決めた入学者もおり、コロナ明けは留学もできる・留学しなくても学べるという観点で、募集人数を増やしていきたい。

瀧山：

- ・大好きな英語を生活の中心に置いて、高校の卒業資格は通信制のほうで取れるというのを今年1年かけて準備し、英語をとことんやっていきたいという方に春から来ていただく。授業開始時間を11時にするなど通しやすい雰囲気をつくり、専門学校への内部進学 of 仕組みを今後整えていきたい。

- ・留学に行けないというコロナの影響が一番受けた分野であり、英語を学ぶ学習意欲を保つのは厳しく、希望先の求人が出ないというのも学習のモチベーションを保つのがここ数年難しかったと思うが、引き続き英語教育ナンバーワンを目指していきたい。

- ・次年度は校舎改装により、英語のプライベートレッスンができる教室を9つとし、フィリピンセブ島から新たに1名、5名体制で運営していく予定。

(5)委員長からの総括【岡委員】

- ・専門学校生でも就職の希望があまりない層と目標をきちんと持っている層と二極化して

いる。

- ・高校 2 年生の段階で自分の進む道をおある程度決めている現状、高校 1 年か場合によっては中学生への募集活動、学校の良さをどうやって学生に訴求するかを考る必要があるのではないか。

(6)閉会の挨拶【瀧山】

- ・いろいろなご意見と励ましのお言葉いただき、今年度以降の運営に活かしていきたい。
- ・進路の早期化で、以前は高校 3 年生にアプローチをかけていたが、3 年生では早い段階で進路が決まっている状況が多く、さらに早い段階からアプローチしていく必要があると感じている。
- ・高等部では新しくキャリアデザインゼロという職業発見の科目を準備しており、英語を学びながらどんな職業があるのか、空港・ホテル・大学を訪問し、進路実現できるようカリキュラムを作っている、企業様の力をお借りしたい。
- ・次回 2023 年度第 1 回学校関係者評価委員会は、2023 年 9 月 2 日（土）に実施予定。

以上